鬼無里（きなさ）の郷

中村重義

うたかたの如き愛恋二つ三つ過ぎてたちまち卒寿のくらやみ

項垂れて祈りの姿勢取る時の人は天上の火を意識する

制服の少女の如きアキアカネ風の隙間を流れてゆけり

目覚むればこの詩句消えてゆくのかと暫し転ばす夢の中にて

喪服着て吊革に手を伸ばしいる我は半分死者かも知れぬ

旅の日の遊び心に荷を解けばヴェネツィアン・グラスの朱転び出る

さてともう眠るとするかきびなごの銀の刺身も食べ飽きたから

ひらひらと病後の足を運びゆく上りは女坂下りは男坂

頑(かたく)なに自説曲げざる人のありたいした説でもないのにと思う

わが友は鬼無里(きなさ)の郷に死にたりと聞けば親しも鬼無里の郷は